

目的 和服を着用した際、その縫合部分で損傷が著しいのは、袖付けの留めの部分や背縫い、特に尻部に当たる部分である。そこで本研究の第2報では、浴衣地を用い、その縫製の種類、くけ方の種類の違いが、背縫いの単純引張強さ、破裂強さ、縫目開きにおよぼす影響について検討した。本報では、いしき当ての有無の違いが強さにおよぼす影響、さらに、実際に浴衣を着用した場合に、尻部の縫目にかかる応力について検討した。

方法 [試料] 浴衣地：綿100%の平織。縫糸：綿糸#30。[縫製] 縫い方：ミシン縫い、手縫い(並縫い・半返し縫い)のそれぞれについて、1度縫い、2度縫い、袋縫いの総計9種で、針目は0.3mm。くけ方の種類：耳ぐけ、千鳥ぐけ、折りぐけの3種。[破壊試験] 単純引張試験(グラフ法)、破裂試験(定速伸長形法)の2種。

結果 ①くけ方の種類では、いずれの縫い方、破壊試験の場合も、千鳥ぐけのように、身頃への拘束度の大きいものの方が、大きい値を示す。②破裂試験の場合は、1度縫いより2度縫いが、さらに、袋縫いの方が強くなるが、本報での縫目に垂直な引張試験の場合には、これらの縫い方の違いは強さにほとんど影響しない。③いしき当てをつけることによって、引張試験、破裂試験の場合には、著しい効果が見られる。④ラテックスゴムを用いて、尻部での歪を求めたところ、体形による差は見られるが、逆台形の形をとり、静止立位・90°前屈では、横方向へは伸びても、縦方向の収縮はほとんど見られない。椅座位の場合は、横方向への伸びも前二者より大きく、縦方向では布が拘束されるため収縮する。この歪より、逆に縫目部分に働く応力を検討した。